

# 特別賞 丸善株式会社賞

『検定不合格 日本史』 家永三郎著

教養デザイン研究科 博士前期課程 2年 柳井孝太

『検定不合格日本史』とは、非常に刺激的なタイトルである。書籍として出版されながら、表紙に「不合格」と堂々と書かれている。実はこの本は、1957年に文部省が実施した教科書検定において、不合格の烙印を押された元教科書候補なのである。高校生の手に取られることもなく、長らく闇に葬られていたが、1974年に書籍として再び日の目を見た。今日でも教科書に対する「検定」は続いている。「検閲」とは違い、仮に不合格になっても書店での販売は自由だからだ。この本の著者である家永三郎は、日本史教科書への国家介入を嫌い、32年間にわたる裁判を闘い続けた歴史家である。1997年、最高裁判所は一部勝訴の判決を出した。これが検定制度の透明化や基準の見直しに繋がったと言われる。この本は、家永三郎が教科書検定の意義を世に問うために出版した本であり、彼の闘いの原点なのである。この本が不合格判定を受けたのには幾つかの理由があるが、その中でも象徴的なものを取り上げてみたい。

過去の史実により反省を求めようとする熱意のあまり、学習活動を通じて祖先の努力を認識し、日本人としての自覚を高め、民族に対する豊かな愛情を育てるという日本史の教育目標から遠ざかっている感が深い。

この不合格理由を読んで、どのような感情を抱くかは人それぞれだろう。だが、ある種の危うさを感じるのは私だけだろうか。今日まで続く歴史認識の火種が既に燻っているのがわかる。歴史ほど国家に利用されてきた教科もないだろう。だが、著者がこの本に込めた思いは全く別のものであった。その思いを端的に示す文章が「日本史学習の目的」として序論に書かれている。

私たちが歴史を学ぶのは、私たちの住んでいる世界をよく知り、私たち自身をよく知り、この世界をさらによくし、私たち自身をもっと進んだ人間に向上させるためである。

非常に単純明快な目的である。国が目指した教科書と、著者が目指した教科書との差が一目瞭然だろう。教科書に求めるものが根本的に異なっているのである。そもそも、国民が過去の過ちと誠実に向き合おうとすると、国を愛せなくなるとは不思議な話である。恋愛に例えて考えてみよう。その人の長所を好きになるのは当たり前のことだ。では短所を見て見ぬ振りをしたらどうだろうか。おそらくその恋愛は長続きしないだろう。国を愛するというのも同じである。過去の過ちに目を背けたような愛国心は本物ではない。更に言えば、過去の過ちを知って愛せなくなる程度なら、その人物の愛国心は偽物だろう。

「過去に目を閉ざす者は結局のところ現在にも盲目となる。」ドイツのヴァイツゼッカー大統領が残した有名な言葉である。家永三郎も、過去を照らし、現在、そして未来の道標となるような教科書を目指していた。この本は、歴史教育とは何かを世に問うた歴史的な一冊であると言っても過言ではない。是非一度手に取ってみてはいかがだろうか。